

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二號

第三十三卷

昭和六年八月一日發行

論叢

經濟的變動の分析……………文學博士 高田 保馬
デイルタイ哲學と經濟哲學……………經濟學博士 石川 興二

時論

特別會計の整理……………法學博士 神戸 正雄
所得稅の稅率の改正……………經濟學博士 汐見 三郎

研究

農家における米の販賣……………經濟學士 谷口 吉彦
統計利用の意義と問題……………經濟學士 蜷川 虎三
東海道濱松宿に關する一考察……………經濟學士 大山 敷太郎

說苑

明治初年御用金の負擔者について……………經濟學博士 本庄 榮治郎
産米の管外移出高の季節的變動……………經濟學士 八木 芳之助
金問題批判……………經濟學士 松岡 孝兒
アンドレアデス氏「日本の人口」について……………經濟學士 宮本 又次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

經濟論叢

第三十三卷 第二號 (通卷第百九十四號)

昭和六年八月發行

論叢

經濟的變動の分析

高田保馬

經濟理論の世界のうちに、靜態の考察たる靜學と等しく、動態の考察たる動學があることは別に述べたところである。而して、今、この動學の理論が如何なる部分に分たるべきかを考へて見よう。これは動態が如何なる要素に分析し得らるべきかを考へるに外ならぬ。まづ結論とも見るべき私の見方を述べて置く。動態の考察の區分は、動態を構成するところの變動そのものの區分とならざるを得ぬ。勿論變動そのものが種々なる立場から種々に區分せられ得ると思ふけれども、茲には與件データの變動と云ふ觀點を中心として考へる。

此與件を次の如くに區分して見る。(A)直接與件と間接與件。直接與件と云ふはそれ自體直接に需要と供給の上に作用する與件、それ自體、直接に經濟的數量に干涉するところの與件である。間接與件と云ふは、ただ直接與件を通じてのみ經濟的數量の上に作用を及ぼすところの與件である。靜態成立の條件として、人口の一定、資本の一定、欲望の一定、生産方法の一定、生産組織の一定といふことが、今まで數へあげられてゐる。これらは直接に需要と供給とを左右するところの與件に屬する。天災地變疫病より内亂革命等に至るまで、經濟的變動をもたらさざるはないけれどもそれらは結局此直接與件の上に作用し、これが變化を通じてのみ經濟の上に作用するものであると見得る。此意味に於いて、それらは間接與件として數へらるべきものである。直接與件に屬するものとして私は次の如きものを數へる。まづ、需要の側を支配するものとして、需要の主體數量、即ち人口、及び個人的需要。次に供給の側を支配するものとして廣義に於ける生産方法と資本數量。需要供給の雙方を一樣に支配するものとして貨幣側の事情、たとへば金の數量貨幣制度乃至信用上の慣習の如き。但し、此貨幣側の事情は屢々第二次的のものとして軽く取扱はれたることが多い。

人口、資本、個人的需要、生産方法、生産組織の五のものゝ不變を靜態成立の條件として數ふことはクラアク以來屢々見らるゝ立場である。これはその實、前述の如く需要を支配するものと、供給を支配するものとに區分せられると思ふ。貨幣

側の事情は、貨幣がたゞ單に、流通媒介の手段として何等能動的なる役目を營まずと見る立場に立つときには、これを看過し得る。このことは靜態に關する考察についてならば、ある程度まで認容せられぬこともない。けれども動態に關する限りかかる取扱は頗る困難であり、許しがたいことと思はれる。前に掲げたる五の條件の不變については、クラアク、シュムペッタの諸著のほか私のこれを取扱へる諸書を參照。『經濟學研究』の第一篇。『景氣變動論』の序論。

(B) 持續與件と動搖與件。又は構造與件と機能與件と稱することも出來よう。茲に持續與件と云ふは、一たび變動によりて成立したる以上は存續する性質のもの、次に來るところの變動によりて成立するものと累積するものである。この與件の基礎は社會生活の深きところに根ざしてゐると云ひ得る。動搖與件と云ふは、一たびその變動があらはれるにしても、容易にまた、それが消滅するが如きものである。それは社會生活の割合に表面的なところに根ざしてゐると見るべきである。見込の錯誤、人氣(悲觀と樂觀と云ふが如き心理的因子)、惰力等によりて變動するところの與件の如きは動搖與件である、これらによりて作用せらるることなく、技術の變化、國富の増進、市場の開拓等によりて變動するところの與件を持續與件と云ふ。これはその性質に於て堆積的、他は交代的である。一方の變動は存續するが故に相堆積し、他方の變動は消滅するが故に相代謝する。勿論事象の差異によりて、一がつねに持續與件であり、他がつねに動搖與件であると云ふとは限らぬ。等しく需要の變動にしても、その根ざすところの深淺によりて、ある部分は持續的であり、ある部分は動搖的である。かかる意味に於ける持續與件を稱して構造與件、又は經濟構造と云ふ。

若し經濟を一の有機體の機能にたとへるならば、此持續與件こそはかかる機能の基礎となり、その方向、性質を決定すること、まさに構造として見られべきが故である。これに對して、動搖與件は經濟の一時的なる機能をのみ左右する、それ自體、一時的のもの、容易にもとの姿に復歸するものである。かるが故に之を機能與件とも云ふ。おもには經濟の循環に伴ふて變動し、また回歸する。それゆゑにこれを循環與件と稱するも差支ない。

經濟生活に於ける與件のすべてを經濟構造 (economic structure, ökonomische Struktur) と云ひその變動を構造變動 (change in structure, Strukturwandlung, Strukturveränderung) と見る見解は修正せらるべきであると思ふ。構造變動と景氣變動とは嚴密に區別せられ、前者は構造的のもの後者は機能的のものと見られてゐる。而も、異なる機能の姿は同一の構造を基礎として成立し得る。従ひて、景氣の循環する間、構造には變化なきことを得るはずである。然るに例を今、需要にとりて見る。個人的需要は一の與件である。ところで、此與件は景氣の段階に應じてそれぞれに變化する。上昇期に増加して下降期に減退する。此與件の變動は之を構造の變動と云ふことは出來ぬ。それはやがて他の方向の變動にとりて取り代らるべき變動である。これに反して國民所得の一般的増加、又は分配の變化は自ら個人的需要の變動をもたらず、かかる變動は持續的のものにして、早晚反對の方向の變動によりて取り代らるべき性質のものではない。此の如くに見れ

ば、興件の變動のうち、持續的なものと一時的、動搖的なものとが區別せられ得べく、二者のうち、ただ前者のみが構造變化として取扱はるべきである。

ワゲマンは經濟的要素を理論的又は實際的立場から單位として假定すべき經濟的又は事情を云ふとてゐる。これを組織的事象又は經濟的數量と見てもいふと思ふが、その實これらよりも少しく範圍の廣いもの、それ自體は經濟的でなくとも、經濟を決定することの強いものである。此要素が構造的と循環的との二に分たれてゐる。構造的要素とはその性質上、孤立的なる變化を蒙れるところの要素である。普通に、興件、基礎、既知數として知られてゐるものである。考察者個人の見方によりて、何をかゝる要素と見るかについては意見區々であるけれども、一般に次の如きものを含む。人口、地域、自然的地理的事情、産業組織、消費者の趣味、技巧及び經營等¹⁾。興件の中に基礎的のもの (basic data) と然らざるものとを分つときには、基礎的興件のみを構造と見ることが正しいであらう。

(C) 其變動の可逆的なる興件と不可逆的なる興件、略して可逆興件と不可逆興件、興件自體、從ひて興件に決定せられて生起する經濟的事象の變化が逆なる方向に進みうるものがあり、又然らざるものがある。勿論循環的興件のすべてはその變化可逆的なること云ふまでもない。構造的變動にいたりては、もとより循環的興件の如く、交替的に反對の方向に進むことの豫期せらるることとはないと云へ、その性質上、復歸の割合に容易なるものがある。これらは可逆的な興件に數へらるべきである。大體から見て、經濟的數量は、價格系列に屬するものと、財量系列に屬するものがあり、この外に價額又は價量系列に屬するものがある。利子、勞銀、物價などは第一のものに、生産物數量、消費高、取引口數の如きは第二のものに、賣上總高、手形交換高と云

1) Wagemann, Economic Rhythms, 1930. p. 24.

ふが如きものは第三のものに屬する。第三のものは大體一定の方向をすすみて、時に後退するにしても、後更に、それよりも前方に進む。第一のものは一定の方向をとるにしても時ありて又反對の方向に進む、從ひて復歸すること、屢々である。第二のものは第一のもの第三のものの複合として見られ得る。大體に於ては一方の方向に進みてあとがへりすることなきものである。

大體に於て後に云ふところの生長及び發達、一括して長期的變動を示すところの事象は非可逆的である。同一の事象とてもそれが循環的變動を示し得る限度に於てのみ可逆的である。此長期的變動を示すことなしと思はるる事象は可逆的である。前者は長期的變動に對して標徴的系列 (symptomatische Reihe, symptomatic series) として取扱はれ得べく、後者は循環的變動に對して標徴的である。

さてこれらの與件の區別から次の如く考へ得る。

(一) 構造與件、從ひて經濟構造の變動に伴ふところの變動。これを假に稱して構造變動と云ふ。それは構造の變動に伴ふところの經濟的變動の意味である。これを二に分つ。

(a) 前進變動。經濟自體の内部から構造の變化が行はれる。云はば構造變化が内生的に、即ち經濟の本質自體から行はれる。而して此構造變化に伴ふ經濟の變動がある。かかる變動は他の事情にして之を妨げざる限り不斷に一定の方向に向ひて前進する。此種の構造變化として數ふべきは

資本と人口との増加、生産技術と欲望との變化、これである。此中、資本と人口との増加は餘剰の蓄積そのことに伴ふものである。何等生産組織の變化を意味せざる點から、之を生長(wirtschaftliches Wachstum, economic growth)と稱する。生産技術と欲望との變化は生産力の増加、即ち生産方法の變化を意味する。生産方法の變化が欲望の變化を伴ふのは次の如き事情による。欲望の變化には單純に流行的なるものがあり、それは容易にもとにもどる。けれども生産力の増加によりて一層精緻、便利のものが同一の價格に於て供給せらるるに及べば、以前の粗野なる品物はすてられる。此種の變化はあともどりする事がない。而してかかる二の變化を合せて、發達(schaffliche Entwicklung, economic growth)と稱し得る。それは生産組織そのものの増大よりもむしろ變革を意味するに外ならぬ。此生長と發達とを促すところの刺激は常に經濟の内部にはたらいてゐる。それは經濟原則に外ならぬ。而して此原則の作用が不斷であるが故にかかる變動もまた不變であり、而して大體、一定の方向をめざしてゐる。前進的變動(fortschreitende Veränderung, progressive change)と云ふ理由はそこにある。その統計的表現は長期的傾向又は趨勢(secular trend, trend, Dauerichtung, Grundbewegung)である。統計的資料について見るに、一定の時期をへだてて回歸する變動のほかに、長期を通じて一定の方向にすすむところの傾向がある。それを統計的技巧によりて分離する、それが長期的傾向に外ならぬ。

此種の變動が前進的であることは、社會經濟の全體を通じてはじめて云ひ得らるべきことである。従ひて社會經濟の一地域部分だけを切りはなして見る時には、變動が前進的ならずして後退的であり、又不連續的であることが極めて屢々である。生産技術が甲の原料から乙の原料にうつる時、A國は甲の原料をもち乙の原料をもたず、B國はその逆であるとすれば、A B二國に於ける生産數量は飛躍的に變動し得る、而してA國にとりて後退的でもあらう。これに關聯して經濟的發達又は進歩の不均等の法則 (*Gesetz der Ungleichmässigkeit der wirtschaftlichen Entwicklung, law of nonuniformity of economic development*) を述べよう。此法則は(1)今の場合の如く、A B二國、又はAの社會經濟とBの社會經濟とに於てある産業の發達の一樣に行はれざることを意味する。此際A Bの全體、又は世界經濟を一括して考ふるときには、後退もなく、變動も大體漸進的(歩調に遅速はあれ)のものと考へられ得る。(2)社會經濟全部について見るも、内部に種々なる不均等の發達がある。全産業の前進の歩調は時によりて決して一樣ではない。あるときは急速にあるときは遅緩である。而してこのことがしばしば、長期波動と稱せらるるものの實體である。次に種々なる産業分枝を比較するに、あるものの前進は急速であり、あるものの前進は遅緩である。そればかりではなく、あるものが急速に前進する背後に於て、他のものが急速に後退する場合すらある。これらの前進と云ひ後退と云ふのは、主として生産物數量について云ふことは後に述

ぶる通りである。

(b) 不連續的變動、若しくは外生的變動。前進的變動は前述の如く經濟そのものの中に變動の原因を有するところの變動である。然るに、經濟的構造は經濟にとりては外部にあるところの事情に基いて變動し、それにつれて經濟の變動がある。經濟内部から生ずる變動即ち内生的變動 (endogene Veränderung, endogenous variation) に對して、外生的變動 (exogene Veränderung, exogenous variation) と云ふ。大體に於て前者は連續的な變動であるが、これは不連續的な性質を有する。此外生的變動は大體から見ても二に區分し得られる。一は自然的のものにして、他は社會的なものである。例へば、天災、地變、疫病と云ふが如きは前者に屬する。社會的なものとしては戦争、革命の如き偶發的なものと、種々なる制度の改正の如き必然的なものがある。これらに基く構造變化には勿論漸進的なものがないとはしない。けれども、大體に於いて、それは飛躍的な變動である。而して變動の方向も一概に前進的なものと稱しがたい。變動の性質に従ひてその方向が雜多である。

これは統計資料の上には、大體偶然的變動として、不連續的な變動としてあらはるるはずである。けれども、事實の上に就いて、變動のどれだけを長期的のものとし、どれだけを偶然的なものとするべきか、之を分離する方法はまづ求めがたい。普通の計算の方法に於て求めらるるこ

ろの長期的傾向は中にこの不連續的變動の作用を計數の基礎として含めるものである。換言すれば、長期的方向を求むるに當り此偶然的乃至不連續的變動を抽象することが一の理想ではあるけれども、それは實現せられてゐない。

こゝに述べたる(a)(b)の區別はその實質に於て內生的變動と外生的變動との區別である。私は此區別をまた前進的變動(長期的傾向)と偶然的變動の區別と相平行せしめようとする。此平行の完全でないことは之を認める、けれども大體に於て認められてゐることも確であらうと思ふ。

(二)機能與件の變動に伴ふところの變動。これを假に稱して機能的變動と云ふ。此種の變動は大體から見て、之を二種に分つことが出来る。

(a)循環的な變動、同時にそれは內生的な變動である。經濟内部の事情に基いて、一定の動搖的な與件變動がある。而してこれに伴うて經濟が律動的な變動を營む。その形式の詳細に立入ることは、今の仕事ではない。

(b)外生的な、而して不連續的な變動である。所謂動搖するところの與件が時々、事情によりて變動し、それにつれて經濟の變動が行はれる。然れども此變動はまづ、機能的のものにして構造的なものではない。例へば疫病の作用が人口を激減せしむるときにはそれは構造的な變化である。けれどもかかる事情なしとすればその與ふる障礙は直に除かれる。かかる場合、變動は單

に機能的のものである。收穫の豊凶の甚しい場合に於ても然り。あまりに凶作にして穀物輸入の爲に對外收支が永久的不利を來すが如き事情に置かるるときには構造變動であるが、ただ次年の作柄によりて取もどされるだけの變化に止るとき、それは機能的のものである。社會的事情に基づくところの變動についても同様のことを云ひ得る。従ひて此種の變動は統計の表面には偶然的不連續的變動としてあらはれるであらう。

以上の區別は變動の事情が構造的なるか、又經濟の側から見て外生的であるか、内生的であるかを標準にしたのであるが、これに關聯して更に、變動を形式的に區分することが出来る。かかる區分は直に景氣の統計的研究と連絡を保ち得るものである。

(1) 長期的變動。構造の變動による經濟的變動にして而も内生的なるものは、前述の如く、前進的變動と稱し得るものであるが、それは同時に長期的傾向をもつところの變動である。もとより此前進と云ふは、一方に於て、事情さへ許せばあくまで進行をつづけ得るところのと云ふことを、他方に於て、不連續的な變動をなさざるところのと云ふことを意味する。従ひてそれはある一定の軌道、即ち長期傾向に於て、進行すると共に又退行することのあることを意味する。進行し又退行すると云ふは、變動の方向がすべての經濟的數量を通じて一樣にと云ふことを意味するのではない。又その中に道德的意義を含有しないからただ、經濟的數量の増加或は減少を意味する

だけの事である。前述の如く、經濟的數量には中に不可逆的のものがある、これにありては前進的變動が大抵ただ一方にのみすすみ逆もどりする事がない。財量の系列、價量の系列はこれに屬する。可逆的のものにありては、長期變動の方向があるにはあるけれども、時ありてか轉換する。ただ一方をのみ指して動くことがない。價格系列はこれに屬すると見得る。従ひて長期的傾向がすべての經濟的數量の系列を通じて一樣であることは勿論あり得ないわけである。

こゝに價格系列(又は價値系列)と云ふのはいはゆる *Verkehrte money volume series* である。價量系列と云ふは取引せらるる財の數量にその價格を乗じたるもの、即ち取引高數量を指すのである。第三のものは多くは財量系列と方向を一にするけれども、必ずしもさうではない、そこに中間的性質があるわけである。財量系列に屬するものとしては、生産財、生産額、その消費額、手形交換高指數などをあげ得るが、これらは常に人口増加の作用をその中を含むでゐる、そこでこれを除却する爲に、人口一人當りのかゝる數量を求むることもある。此一人當り數量とても多くの場合、たゞ一方にのみ前進するところの系列であることが多い。

(2) 波動的變動、或ひは循環的變動。これは、變動が連續的に行はるる點に於て、長期的變動に同じい。けれども、ある平行的位置又は状態から反對の二方向にたえず交代的に變動をつづけることをその特徴とする。此意味に於てそれは波動運動であり (*Wellenbewegung, fluctuation, wave movement*) 律動であり (*rhythmical movement, Rhythmus*) 循環的變動であり (*cyclical movement, cycle, Zyklus, zyklische Bewegung*) 位置の交代 (*Wechselage*) である。ただそれが確定の周期を

もつと云ふことは多くは云はれ得ない。ある一定の長さを中心にして可なりの範圍まで伸縮するところの期間が狀況の復歸までに介在するし、又外生的原因の干涉の如何によりては、此波動の全く攪亂せられて出現せざることも可能である。

此波動には期間又は周期の確定せるもの、所謂固定律動的 (with fixed rhythm) のものがあり、それが不確定のものがある。前者に屬するものとしては一般に季節的變動があげられる。若し更に、重要ならざるものをもあげれば、この他になほ、毎月 に於ける旬的變動、週内に於ける曜別的變動、毎日内に於ける時間別的變動がある。けれどもこれらのものは、これを全然、靜的のものとして取扱ひ得るであらう。従ひてこれを變動と云ふのは正しくない、ただ統計的形式の意味に於てのみ變動と稱し得べきものである。而してこの見方を貫き通してゆけば、所謂季節的變動 (seasonal variations, Saisonschwankungen) もまた、まことの意味に於ける變動ではない、それはあくまで靜態的のものに過ぎぬと考へ得る。これを變動として取扱ふのはあくまで、統計的形式のことがらである。種々なる經濟的數量の時間的系列が不斷に變動する。その變動は單に長期的變動及び後に述ぶるところの不定周期律動的變動、偶然的變動だけから成るのではなく、たえず此季節的なる動搖を含むでゐる。而して變動の分析から云へば、此季節的變動が他の變動と全然對立的のものとして取扱はるることを必要とする。之を靜態的と云ふのは靜態に於ても生起す

るはずのものである。動態をまたざる事象であることを意味する。(此點についてはなほ再考を要すると考へてゐる)。此確定周期の變動の根據は一に、物理的のものである。嚴密に云へば、物理的事象(天文學的周期)そのものから直接に來るものと、物理的事象に基いて設けられたる人爲的制度から來るものとを區別し得るけれども、それには今論及しない。此種の變動の中、最も注目せらるるところの季節的變動について見る。四季の變化の用期的なことが農作物の耕作、收穫、供給需要の變動、價格の變動を支配し、又氣候時季によりて作用せらるる工業生産物の供給需要を支配し、又人爲的季節に依りて定まるところの取引數量、信用數量等の動きを支配する。而して此種の變動は統計の原資料から單純なる方法を以て比較的完全に除却せられ得る。かくして、容易に、長期的變動と景氣變動とを主成分とする變動系列を遊離することが出来る。

此季節的變動を求むる方法としては種々なる仕方が利用せられ得る。その中、最も簡單なるものは移動平均よりの偏差である。たと此移動平均の方法を應用するにしても、詳細についてはいろいろ考ふべきこともあるが、今はそれにふれない。今日景氣研究に従事する人々の間に於て一般的に用ひらるゝものは連鎖比較法である。これは一九一九年パアスンズのはじめて用ひたるものであると云ふ。

上に述べたるが如き事情によりて、固有の意義に於ける循環的、即ち波動的變動として認められ得べきものは不定周期の波動だけである。それは、從來、景氣變動、又は景氣循環と稱せられたるものに外ならぬ。而して今日に於て、あらゆる經濟的變動の中、最も重要なるものと見られ、

研究の手の行き届いてゐるものである。而して經濟的變動と云へば、大抵これが意味せられてゐるほどの次第である。

此種の變動は今日、しばしば三に分ちて論ぜられる。それは重に期間の長短による。まづその中、最も重要なものとして取扱はるものは、七年乃至十一年の周期をもつところの、而して從來の景氣理論に於て主として取扱はれたるものである。他の波動と對立せしむる場合にはこれを中期の波動と云ふ。これを中心として、更に長期なる波動と、更に短期なる波動とが認められる。長期なる波動としては、過去約百四十年の歐羅巴の歴史について見るとき、平均五十年内外を一周期とするところの波であると見られる。これに對して短期の波動と云ふは約三年半を以て一周期となすところの變動であると見られる。此三種の波動の存立をそのまま認むるときには、三年半の周期をもつ短い波と約十年の周期をもつ中ほどの波と、五十年の波をもつ長い波とが相重つてあらはれる。その姿は池中にはじめ巨大の石をなげて巨浪を起し、直ぐ次に中ほどの石をなげて中ほどの波を起し、又すぐに小石をなげて小い波を起す、此三の波が重り合つて起伏する姿にてゐる。かう云ふことになるのであらう。けれども此三波動説がどこまでそのままに認めらるるやとは十分なる考察を必要とするところである。

(3) 不規則的變動、即ち偶然的變動。此種の變動は消極的にこう云ひ表はすことが出来る。それ

は一定の方向に向つて前進するところの變動でもなく、又波動的のものでもない。しかし積極的にはどう表現し得るか。孤立的なる事情に基づくところの、従ひて不連續的な變化であり、従ひて動態理論の中に理論化せられ得るところの、此意味に於て偶然的なる變動である。従ひて、動態理論の構成の如何によりては、一方の立場から見ても偶然的なる變動も、他方の立場から見ても偶然的ならざる變動と認められる。

此偶然的なる變動には、構造的なるものと、機能的なるものとを分ち得る。このこと、前に説明したところである。すべて變動が一時的にして容易に舊態に復し得る場合にありては、之を構造的のものと稱しがたい。此意味に於て不連續的なすべての變動を、孤立的なる構造變動と同視する見解は採用しがたきものである。

長期的變動と循環的變動との二者は大體に經濟の内部より生ずる、云はば内生的原因をもつてゐる。これに對して、偶然的變動はすべて外生的なる原因をもつ。従ひて、それはその形式による區分を試みることにその不規則性の故に試みがたきにせよ、その原因の如何によりて區分することは可能である。此變動の原因を自然に於けるものと、社會的事情に於けるものとに分ち得る。自然的なるものは、天災、地變、疫病によるが如き財と人との破壊、又は格別の豐作農漁の如き、助長とを數へ得る。社會的なるものとしては、戦争、革命、内亂の如き突然急激なる變化と、政

治的、法律的、乃至社會的なる變化とをあげ得る。後者は偶然的・不規則的ではあるけれども、その變化の程度が前者の如く根本的ならず、ただ經濟の一部分にのみ作用するものである。税制の變更、階級關係の變化、法的獨占の形成と云ふが如きは、之に屬する。

勿論一の立場からは全然偶然的なる變動とても、他の立場からは偶然ならざる變動として見らるるものも多い。例へば收獲の豐凶の如きは一に天候の如何に左右せられ、此天候の如何は全く偶然的なるものと見られる。けれどもある立場からは此收獲が一定の星學的循環現象によりて制約せられ、それ自體、一の循環的なる變化である。又戰爭の如きも一の偶然的なる事變と見らるるのが一般であるに拘はらず、長期波動的なる一現象として、從ひて循環的なる事象として認めらるる場合がある。從ひて動態に關する理論組織の如何によりて、合理的なる變動と合理的ならざる變動、即ち偶然ならざる變動と偶然なる變動との限界はいろいろに動く。此間の分界線と云ふものは決して明確なるを得ない。

さて今までの考察に於ては事理を簡明ならしめんがために、一の社會經濟を全く他の社會經濟から切りはなして考察した。然るに事實に於ては、社會經濟の變動は外部との交渉によりて著しく作用せられる。特に一の社會經濟又は國民經濟の構造は單にその經濟内部の事情のみによりて定まるものではなく、外部との交渉によりて定まる。これを比喻的に表現して見る。一の社會經

濟それ自體が一の有機體である。而して一の國民的又は國家的環境に適應して成立してゐる有機體であり、それ自體として定められ得るところの一定の構造をもつ。然るにそれは同時に、世界經濟の中に包括せられてゐるところの一構成部分である。而して世界經濟と云ふ有機體がその社會環境の事情に従ひて一定の構造をもつ。此構造に於ては一社會經濟それ自體として一の構造をもつのではなく、他の外部の經濟との聯關に於て一の構造をもつのである。而して此部分の構造は、その經濟について見る限り、外部の社會經濟との交渉に於てのみ考へられ得る。それゆゑにかく對外部の交渉に於てもつ構造を外部的構造と云ひ、外部の社會經濟に對する交渉を離れてもつところの構造を内部的構造と云ふ。而して、今までは構造の變動を考へる場合に於ても専ら内部的構造のみを考へたが、茲には廣く外部的構造の變動をも併せ考へたい。

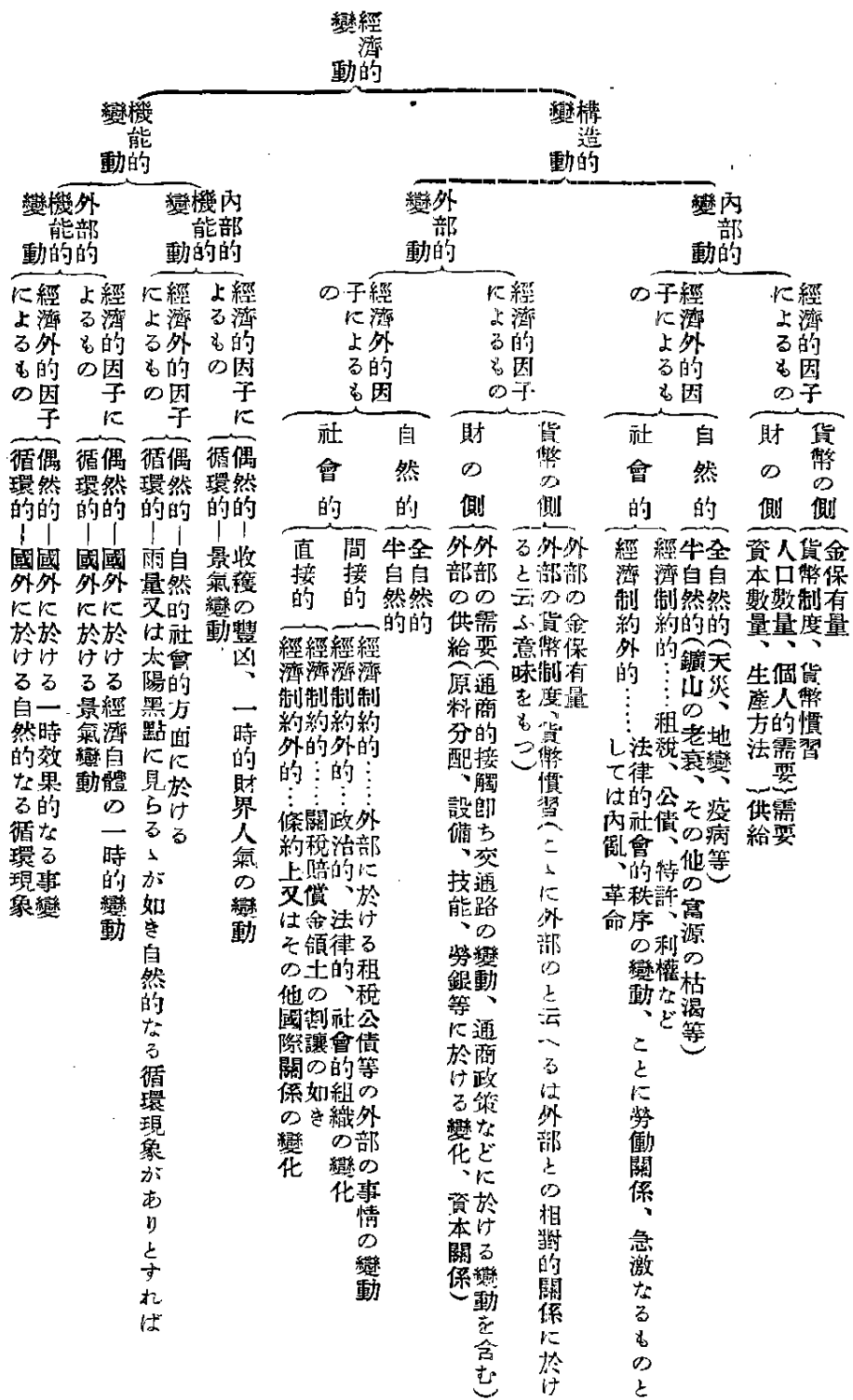
外部的構造の變動は換言すれば、對外的なる根本的經濟關係の變動に外ならぬ。それは二に分ちて考へ得る。一は由て來るところ經濟的なるか經濟外的なるかである。前者は貨幣の側に於けるものであるか、財の側に於けるものであるかによりて二分せられる。貨幣の側に於けるものを金保有量の變化と、貨幣制度貨幣慣習に於ける變化とに分つ。注目すべきはこれらがつねに相對的なものとしてのみ意義を有することである。例へば外國に於ける金保有量の變化も、これに相應じて平行的なる變化が國內の金保有量にあれば、そこには、此點に於ける構造の變動がある

のではない。貨幣制度についても同様である。外部構造と云ふものを表はす表現に比較的のものと交渉的のものとある。今のべたるものはその比較的のものである。交渉的なるものと云ふのは外國市場の新たな開拓と云ふが如く、その表現自體對外の交渉の變化を意味するものである。なほ、財の側に於ける變化を考へる。外國に於ける需要の變化。外國に於ける供給、ことに生産費の上の變化。此二者は前述の如く相對的意義に解せらるべきものである。以下、此種の事項については一々之を説明せぬ。この二の中特に注目すべきものは、原料の所有、設備、技能、勞銀等の相對的事情の變化を意味するところの後者である。次に、通商接觸の増減をあぐべきであらう。交通路の變更、その他の事情に基く市場の得喪、即ちこれである。新市場の開拓が資本主義の發達にとりて如何に重大なる意義を有したかは何人も之を知る。經濟的事情に基く外部的構造の變動としてはなほ第三のものをあげる必要がある。それは資本關係の變動である。經濟外的なる外部的構造の變動は之を二に分つ。一は物理的のもの、他は社會的のものである。天災、地變疫病、氣候の變化の如く、人爲をまたざる變動はこれに屬する。社會的のものは今の立場から二に分つ。一は外部的構造の間接なる變動であり、他はその直接なる變動である。間接なる變動と云ふのは、變動そのものが本來は外部の社會のみに於て行はれ、その影響が社會内部に及ぶものに外ならぬ。直接なる變動と云ふは、相互間の交渉自體の變動にして、それ自體が外部的構造の變動を意味するものである。間接なる外部的構造の變動は、直接に經濟の上に加るからざるか

によりて區別せられ得る。外部の社會の財政々策の變更に伴ふ租税、公債等の事情の變動の如きは前者である。社會階級間の關係の變動、政治的法律的組織の變化は後者である。これらの變動の急激的なるものとしては外國に於ける内亂、革命、戦争などが數へられ得る。外部的構造の直接的なる變動もまた、直接に經濟の上に加はるものと否とに分ち得るであらう。通商關係、ことに關稅、補助金、獎勵金の制度の如き、植民地から本國への租税、納付金、又は賠償金、又は領土の割讓租借の如き、政治的借款の如きは前者である。その他、條約又は實際上の政治的關係そのものの變動の如きは後者に屬する。而してこれらすべての經濟外なる事情をもつ外部的構造の變化も、その結果よりすればすべて經濟的なる變動に直接與件の變動を意味する。

外部的なる構造の變動は外部と聯絡をもつ構造の變動であるが、これと相ならぶものとして外部と聯絡をもつ機能の變動を數へ得る。それには二種のものが考へ得られる。それは外部に於ける機能的變動によりて生ずる内部の機能的變動である。これには偶然的なる變動（さきに述べたる動搖與件の變動の一のもの）と循環的なる變動（動搖與件の變動の他のもの）との二がある。長期的、外部的なる機能的變動と云ふものはない。構造の變動なくしてある一定の方向へつき進み得る變動があるとは考へがたいことである。外部に於て構造の變動を意味せざることこの收穫の變化、社會的事變（選舉、大規模の視察の如き）などから内部の機能の上に變化を來すとき、それは偶然的なる外部的機能變動である。外部に於て顯著なる景氣變動の波浪から内部の景氣の

動きに變動を生ずるとき、それは循環的な外部の機能變動である。
 今、構造の變化について前に述べたところを表示しようと思ふ。



經濟的變動の分析

多少の説明を附加する。こゝに經濟的變動と云ふのは結局經濟的數量の變動であるが、これを變動の基礎又は性質が持續的であるか、一時的、動搖的であるかによりて、構造變動と機能變動とに分つ。

構造と云ふは從ひて、經濟を決定する持續的基礎的事情と云ふほどの意味をもつ。その變動の事情が國民經濟内部にあるか、更に適切に云へばその國內にあるか、然らずして國外との關係(比較、交渉)にあるかにより内部的の二に分つ。機能についてまた然り、變動の事情が國內に存するか、國外との關係にあるかにより分つ。構造變動を經濟的、經濟外的の二に分つた。これは何れ經濟を決定する構造そのものが經濟的のものであるか、即ち直接與件自體に於ける變動であるか然らざるか、による區分である。經濟外的なる構造とても、一應それは直接與件の變動を通して經濟的變動を生ずることは云ふまでもない。外部的構造の變動についてはまた次の如くに云ひ得る。その經濟的なるものも、經濟外的なるものも、共に一應は、國內に於ける直接與件の變動を通してのみ、經濟的變動をひき起すことが出来る。機能的變動についても、全くこれと平行的なることを考へ得る。

構造變動はすべて、何よりも長期的のものであり、次に偶然的、不連續的のものである。而して循環的のものを含むことはない。機能變動は偶然的のものと、循環的のものとを含む。而して偶然的なるものゝ意義にして輕いものとせられ得るならば、構造變動は主として長期變動であり、機能變動は主として循環運動であると云ひ得る。事實に於ける統計的取扱はかゝる見方を無意識的なる基礎となしてゐる、かう云ひ得るであらう。

大體から云へば、經濟的因子による構造變動は生長的發展的のもの、即ち前進的のものである。從ひて、綜合經濟が完全に自足完了であれば經濟外的因子による構造變動を離れて考ふる限り、全體として前進的のものであると見得る。ところで、今や世界經濟的組織を有する場合に、一國民經濟をとり考へても、それは自足完了的ではない。さうでない限度に於て經濟的因子による構造變動も單に前進的のものではない、著しい偶然的不連續的のものがある。それは外部的構造變動に關する。經濟的因子による構造變動であつても外部的のものは、一國民經濟にとりて、全然偶然的であり、又不連續的である。

たとへば、主要なる産業の生産方法が改められ、生産の原料に於ける變化があるとする。綜合經濟の全體から云へば、生産物價額も徐々にのみ變動し、増減の速度の大小はあるにしても、飛躍的な變化、不連續的な變化はないであらう。ところが、原料が變化することは、その生産地たる部分經濟(世界經濟に於けるある一國)にとりては急激なる變化である。原料生産の多額か又は零かの變化である。各國に於ける生産費が此爲に決定的影響を蒙るとすれば、生産物數量も亦急變する。もとより、經濟的因子による構造變動は、全體として見れば、つねに必ず連續的であることを論證しがたいと思はれよう。それにしても、その不連續と、部分經濟、從ひて此場合の内部經濟に於ける不連續とは全く種類をことにしたことがらである。

機能變動は、これを構造變動と同一なる立場から區分することも出来るが、さうしても、考察上の實益が少いと思つたからそれをやめた。而して他の立場からの區分を括弧の中に加へた。勿論此經濟的變動の全分類は組織的論理的のものではない、私の理論形成の順序に於て思ひついたものを記しつたと云ふ程度のものである。